立て続けに見た2本の映画
―『ミケランジェロ・プロジェクト』と『黄金のアデーレ　名画の帰還』―

富田　与　四日市大学教授

Ⅰ

知人に誘われ、「四日市☆映画祭」の第1回準備委員会に出席したのは２０１５年１１月のことだった。案の定というべきか、自己紹介の時に「最近見た映画、一番好きな映画」を話せという。しばらく劇場で映画は見ていない。学生時代に何回か見た『アマデウス』（ソウル・ゼインツ、ミロス・フォアマン監督１９８４年）の話をした。トム・ハルス演じる主人公モーツアルトのけたたましい笑い声が耳によみがえった。ところが、出席者の大半を占める若手にはピンとこなかったようだ。

次の回の自己紹介に備えて、公開中の映画を探した。『ミケランジェロ・プロジェクト』（ジョージ・クルーニー主演・監督）と『黄金のアデーレ　名画の帰還』（サイモン・カーティス監督）の２つを見つけた。どちらの映画もナチスによる芸術作品の略奪をテーマにしている。大学で国際関係を教えていたり、見たいと思った美術展にはどうしても行かないと気が済まないタチだったりで、つい、その方面に映画の関心も向かってしまう。

年末の忙しさにかまけ劇場に足も運べず、忙しさのツケからか１２月の第２回準備委員会も大風邪で欠席してしまった。しばらく２つの作品のことを忘れていると、何の拍子か、カミさんが立て続けに２作品のビデオを借りてきた。新作なので早く見ないと返却するという。それも立て続けに。

『ミケランジェロ・プロジェクト』は、第二次世界大戦末期にナチスの略奪から美術品を救おうとした「モニュメント・メン」の姿を描いた作品だ。いろいろな感情や知的関心がバランスよく喚起され、深みのある余韻を残してくれた。「よく計算された作品」と言うべきか。もうひとつの『黄金のアデーレ　名画の帰還』は、ナチスに略奪されたウィーンの画家グスタフ・クリムト作の「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像　Ⅰ」の返還を巡る作品だ。返還を求めるマリア役はヘレン・ミレンが演じている。『クィーン』（スティーヴン・フリアーズ監督　２００５年）でエリザベスⅡを好演し、テレビドラマでもエリザベスⅠ役を演じたこともある彼女の演技と存在感は、略奪美術品の返還劇という実話に基づく脚本以上に映画の説得力となっているように感じられた。

今回、あらためて２つの映画を見返してみた。今回も立て続けに。

Ⅱ

どちらの映画にも芸術作品の略奪場面が登場する。ナチスが貪欲に美術品を略奪した第二次世界大戦に限らず、戦争では芸術作品がしばしば犠牲になる。目に見える大きさでは、今世紀に入ってからの、タリバンによるバーミヤンの石像大仏の爆破（２００１年）や、ＩＳ（イスラミック・ステイト）によるパルミラ遺跡の破壊（２０１５年）などが目立つ。いずれも世界遺産だ。ただ、数の上では、ナチスによる略奪は桁違いで、略奪された美術品はおよそ６０万点とされる。そのうち、いまだに返還されていないものが１０万点以上もあるという。

ナチス総統のヒトラーはオーストリア生まれで、現在オーストリア第３の都市となっているリンツで幼少時代を過ごした。親の反対を押し切り、画家を目指してウィーンにある造形美術アカデミーを受験。２度まで失敗している。その後、しばらく、ウィーンで不遇の時代をすごした。夢を実現できなかったヒトラーは、終生、美術や美学へのこだわりを持っていたとされる。ただ、彼が権力の座に就いた後の絵画への執心は、創造よりはむしろ収集に向かっていたようだ。

ナチスによるユダヤ人への迫害では、６００万人にも上るとされる人々が虐殺された。ユダヤ人からは、他の財産とともに多くの美術品も略奪された。『黄金のアデーレ　名画の帰還』のメインテーマ「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像　Ⅰ」もそうした美術品のひとつである。ヒトラーあるいはナチスの美術品に対する貪欲さは、非ドイツ的で劣悪だとして自ら「退廃芸術」と烙印を押した美術品にも向けられた。「退廃芸術」とされた抽象画などは、最終的には焼却されたり焼失したりしたものも少なくない。ただ、１６０００点近くの作品は、いったんは収集され、大規模な展覧会まで開かれている。『ミケランジェロ・プロジェクト』では、ドイツ軍元帥ゲーリングが、入城後のパリで、ジュ・ド・ポーム美術館の倉庫に美術品を物色する様子も描かれている。ヒトラー側近にも美術愛好家が少なくなかった。

『ミケランジェロ・プロジェクト』で、わずかにヒトラーの後ろ姿が登場する場面がある。「総統美術館」の構想が語られる場面だ。彼は戦争のさなかも「総統美術館」建設の構想を持っていた。ヒトラーが「総統美術館」の建設を考えたのは、世紀末からの文化の拠点であり、美術の最高学府・造

形美術アカデミーのあるかつての帝都ウィーンではなく、彼が幼少時代を過ごしたリンツだった。

Ⅲ

『ミケランジェロ・プロジェクト』に登場するモニュメント・メンは、第二次世界大戦の末期に実在した美術専門家たちの部隊だ。映画では、7人のモニュメント・メンが、ナチスにより略奪されそうな美術品や略奪された美術品を救出しようと奮闘する。実際のモニュメント・メンは、映画に登場してくる7名よりはかなり多く、作戦が展開された場所もかなり広範であったようだ。映画で描かれているのは、そうした実際のモニュメント・メンの活動の濃縮版といったところだろうか。

画面には、かなりの数の絵画や彫刻が登場する。見ていて気がついた有名なものだけでも、作家別に並べると、レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナリザ」、「最後の晩餐」、ヤン・フェルメールの「天文学者」、「絵画芸術」、「真珠の耳飾りの少女」、そして映画の邦題にもなっているミケランジェロの「聖母子像」、「ダビデ像」などがある。その他に、ファン・エイクの「ヘントの祭壇画」やレンブラントの「自画像」が、あたかも、小見出しのように話の節々に登場してくる。

１７世紀のオランダ、デルフトの画家フェルメール。映画『真珠の耳飾りの少女』（ピーター・ウェーバー監督　２００３年）でも知られ、いまでは、日本でも人気のある画家の一人とされる。２０００年以降だけで見ると、ほぼ毎年のように彼の作品は来日しており、そのたびにラピスラズリから絵具を作った「フェルメール・ブルー」が話題となる。ところが、現存する彼の作品は意外と少なく、３０数点しかない。そこには真贋がはっきりしないものも含まれる。上野の国立西洋美術館が収蔵する「聖プラクセディス」の真贋も、専門家の間で意見が分かれている。

フェルメール作品とゲーリングの間にはこんなエピソードがある。終戦後、ナチスの略奪美術作品の調査を進めていた連合軍は、すでに使われなくなっていた岩塩鉱山アルト・アウスゼーの中でゲーリングの美術品コレクションを見つけた。その中に、当時、フェルメール作とされた「姦通の女」という作品があった。「姦通の女」の本当の作者はハン・ファン・メーヘレン。要するに、贋作であった。「２０世紀最大の贋作事件」ともされる、メーヘレンによるフェルメールの贋作の数々は、後に、それだけで展覧会が組まれるほどの傑作（？）揃いでもあった。すでに「天文学者」を手に入れ

ていたヒトラーへの競争心からだろうか。ゲーリングは、「姦通の女」を十分に鑑定することもなく手に入れていたという。

『ミケランジェロ・プロジェクト』のスクリーンの裏側には、炎あるいは灰としてしか登場できなかった多くの芸術作品がある。「退廃芸術」として廃棄されたもの、ナチスが撤退のときに焼却したもの、あるいは戦火で消失したものや何者かに持ち去られたもの・・・。そんな芸術作品のひとつが、「額縁だけ」で登場している。ピカソの作品だ。作品名は分からない。おそらくナチスが焼却したものなのだろう。焼け残った額縁からピカソの名前だけが読み取られる。祖国スペインを襲ったナチスの無差別空爆の惨状を「ゲルニカ」に描いたピカソ。彼の描いた抽象画は、ナチスにより「退廃芸術」とされた。多くの画家が欧州を去り米国などに亡命するなか、ピカソはパリに残った。ピカソの作品を「額縁だけ」で登場させたのは、おそらく偶然ではないだろう。

Ⅳ

今回見返したもうひとつの映画『黄金のアデーレ　名画の帰還』。ウィーンから米国に亡命したマリア・アルトマンは、ナチスに略奪され、その後オーストリアの美術館にあった「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像　Ⅰ」の返還をオーストリア政府に求めた。彼女がそれを達成するまでの現代のストーリーが、略奪前後の場面とともに描かれている。『ミケランジェロ・プロジェクト』とは違い、この映画に登場する美術作品の数は多くはない。その中で、「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像　Ⅰ」は様々な場面で繰り返し登場してくる。

アデーレ・ブロッホ＝バウアーは、銀行家モーリッツ・バウアーの娘として生まれ、製糖業で財を成したフェルナンド・ブロッホ＝バウアーに嫁いだ。いずれもユダヤ系である。１９３８年、ナチスによりオーストリアはドイツに併合される。アデーレは、併合の１３年前、１９２５年に病気のため他界。４４歳だった。彼女は、「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像　Ⅰ」の返還を求めたマリア・アルトマンの叔母に当たる。映画の中で、現代のストーリーに差し挟まれる略奪前の場面では、アデーレ、マリア、モーリッツなどの家族が一堂に会している事が少なくない。

１９世紀末から２０世紀初頭のウィーンでは、欧州各国から文化人が集まり、カフェやサロンの文化が隆盛していた。こんな偶然がある。ヒトラーがウィーンにいた頃（１９０７～１３年）、その後の歴史にしばしば顔を出すことになる、

スターリン、トロツキー、そしてチトーも同じ町にいた。芸術家のパトロンとなったり、サロンを主催したりしていたのは、アデーレの家族のようなユダヤ系の富豪たちだ。アデーレのサロンには、マーラー、リヒャルト・シュトラウスなどの音楽家のほかに画家たちもいた。その中にいたのが、旧来の美術からの離脱を目指したウィーン分離派の画家たちで、「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像　Ⅰ」の作者クリムトは、ウィーン分離派のリーダーだった。クリムトは２つのアデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像を残している。

四日市の比較的近くにクリムトの作品が２つある。豊田市美術館には鉛筆画の「若い女の横顔」があり、愛知県美術館には油彩・テンペラの「人生は戦いなり（黄金の騎士）」が収蔵されている。すでに旧聞だが１９９５年には愛知県立美術館で「ウィーンのジャポニズム」展が開催され、「人生は戦いなり（黄金の騎士）」のほか、複製も含め何点かのクリムト作品が展示された。展覧会のタイトルにある通り、クリムトの頃のウィーンではパリなどとは違った形のジャポニズムが流行していたという。確かに、そのつもりで映画の場面を見ていると、アデーレやマリアの家族たちが集う場面では、アールヌーボー風の調度も含め、どこか東洋風な感じがしないでもない。

この映画は実話に基づく作品とされる。実際、２００６年、オーストリアで、「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像　Ⅰ」を含む５点についてマリア・アルトマンの所有権が裁判所による仲裁で認められてはいる。この映画で描かれている現代のストーリーは、マリア・アルトマンが返還を求めはじめてからそれが認められるまでの、ごく短い時間でしかないように見える。その短い時間のなかで、多くの機関や人々が関わったかなり複雑なやり取りが交わされている。ただ、多くの機関や人々が関わる出来事であるにもかかわらず、いや、それ故か、手続きや事態の成り行きにどこか不自然さが残る。実際、舞台となったオーストリア、ナチスの歴史を持つドイツなどでは、史実と映画の食い違いが指摘されている。見る者によっては、その不自然さが、映画から説得力を削いでいると感じられても不思議ではないかもしれない。

Ⅴ

仕事柄、外国から配信されるニュースには常に目を通すようにしている。

『ミケランジェロ・プロジェクト』と『黄金のアデーレ　名画の帰還』が日本で公開される２年前の２０１３年１１月、

ナチスにより略奪され行方不明となっていた美術作品１４００点以上がドイツのミュンヘンで発見されたとのニュースが世界を走った。この年にはナチスが略奪した美術品を巡るニュースが続いていた。２月には、フランスのルーブル美術館が絵画７点をもとの持ち主に返還すると発表しており、１０月には、オランダの美術館協会が４００以上の美術館や画廊を４年かけて調査し、１３９点がナチスによりユダヤ人所有者から略奪したものであることを明らかにしていた。

発見されたと伝えられた１４００点以上の作品は、実は、２０１２年に国税当局が見つけたもので、この内１２８０点は当局によりすでに押収されていた。この所有者は他にもザルツブルクに６０点の美術品を持っていたが、２０１４年５月に、病気のため亡くなった。その後、これら１５００点近い美術品の行き先は、略奪品を除く作品の受け入れを表明したスイスの美術館などがあるものの、まだ、すべてが確定してはいないようである。

ナチスにより略奪された６０万点の美術品のうち、１０万点は未だに返還されていない。すでに返還された５０万点には、２つの映画で描かれたような背景、あるいはそれらとは全く違った事情があるに違いない。いまだに返還されていない１０万点については、返還されないかもしれない、あるいは、すでに存在していないかもしれない、という別の事情も思い浮かんでくる。いずれも、戦争が無ければそうはならなかったであろう「それぞれの歴史」と言ってもいい。『ミケランジェロ・プロジェクト』と『黄金のアデーレ　名画の帰還』は、そうした膨大にあるであろう「それぞれの歴史」の存在を思い起こさせてくれる。

『ミケランジェロ・プロジェクト』から『黄金のアデーレ　名画の帰還』へと立て続けに見ているうちに、２本目の『黄金のアデーレ　名画の帰還』の終盤で、『ミケランジェロ・プロジェクト』で聞いたひとつの台詞が気になりだした。「美術品は個人が独占すべきではない。みんなのものだ」。ヒトラーを批判したこの台詞、もしマリアが聞いていたら、彼女の耳にはどう届くのだろうか。

確かに、モニュメント・メンが奪還した美術品は元の所有者にも返還されている。ただ、第二次世界大戦は国家間の紛争であり、モニュメント・メンも連合国軍のひとつの部隊には違いない。一方、返還後、オーストリア政府に帰属していた「アデーレ・ブロッホ＝バウアーの肖像　Ⅰ」は、その後、実際には所有者は変わっていくものの、映画の中ではマリア

の所有権が認められた。これらも「それぞれの歴史」には違いない。戦争、芸術、国家、個人・・・・。どこか釈然としない。名優ヘレン・ミレンの顔。その顔に、マリアの顔とエリザベスⅡの顔、エリザベスⅠの顔がなんだかだぶる気がした。

四日市☆映画祭準備委員会への参加をきっかけに立て続けに見た2本の映画。まとまりのつかない複雑な思いを残してくれた。この１０月、「第1回四日市☆映画祭」が開催される。

【参考文献】

「ユダヤ人と近代美術」　圀府寺司著　光文社新書　２０１６年
「ナチスの財宝」　篠田航一著　講談社現代新書　２０１５年
「フェルメールになれなかった男」　フランク・ウイン著
ちくま文庫　２０１４年
「ウィーンのジャポニズム」（愛知県美術館展覧会図録）１９９５年